

第2章

シンポジウム「スポーツを通じた北九州地域の活性化」

- 日時／ 2009年10月18日（日） 13:00～16:30
会場／ 北九州国際会議場 メインホール
主催／ 北九州市立大学 都市政策研究所
共催／ 北九州市
後援／ 北九州商工会議所、九州経済連合会、北九州サッカー協会、(株)ニューウェーブ北九州、NHK北九州放送局

■ プログラム

テーマ： スポーツを通じた北九州地域の活性化

- 13:00～13:10 開会、主催者等あいさつ
- 13:10～14:10 **基調講演「地域活性化とスポーツ」**
池田 弘 氏 (株)アルビレックス新潟会長、NSGグループ代表
- 14:10～14:25 **北九州市立大学生における関連研究・活動報告「Jリーグチームと大学の連携に関する研究」**
学生グループ「NavyWavy」(指導：見館好隆 北九州市立大学キャリアセンター准教授)
荒金 正和、下田 真奈美、調 真希、杉山 紗希江、中村 祥子、林田 隆太郎、山下 千里
- 14:25～14:40 休憩
- 14:40～16:15 **パネルディスカッション「スポーツを通じた北九州地域の活性化」**
パネリスト(五十音順)： ※役職は2009年10月18日時点のもの
小松 真 氏 北九州市企画文化局 文化スポーツ部長
中村 真人 氏 ニューウェーブ北九州後援会会長、北九州商工会議所副会頭((株)井筒屋代表取締役社長)
傍士 銑太 氏 Jリーグ理事、(財)日本経済研究所 専務理事
真鍋 和博 北九州市立大学地域創生学群 准教授(都市政策研究所 特別研究員)
山木戸 祥子 氏 ニューウェーブ北九州 市民ボランティア
横手 敏夫 氏 (株)ニューウェーブ北九州 代表取締役社長
コーディネーター：
南 博 北九州市立大学都市政策研究所 准教授
- 16:15～16:25 フロアとの質疑応答
- 16:25～16:30 主催者等あいさつ、閉会

1 開会、主催者等あいさつ

【 司会 】

定刻となりましたので、ただ今より北九州市立大学都市政策研究所主催シンポジウム「スポーツを通じた北九州地域の活性化」を開会させていただきます。私は本日の司会を務めさせていただきます、北九州市立大学法学部3年、川上友里菜と申します。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、開会にあたり、主催者を代表いたしまして北九州市立大学の矢田俊文学長よりご挨拶申し上げます。

【 矢田 俊文 学長 】

秋の日曜日、たいへん天気がよくてスポーツ好きの皆さんはこの会場に居るよりもスポーツをやりたいんだと思いますが、長期的観点から北九州市のスポーツ振興のためにこの屋内に来ていただきまして、ありがとうございます。それから、今日基調講演いただく池田会長様には、大変遠いところ、新潟から見て不便なところへ時間をかけて御出席いただきまして大変感謝しております。それから傍士様はじめ東京からも出席していただき、大変感謝しております。

さて、北九州市は新しい市長になってから、基本構想を1年かけて作りました。今、北九州市の市政はそれを中心に行われています。私はその検討を行う会議の座長を務めており、その時に最終的に「都市のブランドをどうするか」ということが議論になりました。ブランドというものは、目標を、市にとっても目標であると同時に、世界、日本にとってもそれなりの納得のいくものを掲げないと、ブランドになりません。色々詰めて議論した結果、ひとつは「世界の環境首都」で、実態よりちょっと背伸びしていますが、なるほど、というものです。北九州は洞海湾をきれいにしたり、世界に冠たるエコタウンというリサイクル基地をつくるなど、大きな環境づくりを行ってきました。もうひとつは1901年以来のものづくり都市であるということで、「アジアの技術首都」です。これもアジアの首都かと言われると、言い切れないところもあるかもしれませんが、ものづくりの拠点としての環黄海における大きな拠点となっていますので、無理のないコンセプトかと思えます。

もうひとつ、やはり心を豊かにする分野、文化・教育・スポーツなど、色々目標に掲げるべきものはあるのですが、第三者が納得するものが見つからないと

いうことで、今のところは環境とものづくりを掲げてやっております。今、市も必死にブランドとなる大きなプロジェクトあるいはイベントを追求しているところですし、我々も大学であり、教育・文化について、私の足元でもしっかりやっております。日本で約700ある大学の中で地域貢献度 No.1 ということで日本経済新聞から連続して評価されておりますし、留学生のサポートについても日本一親切なシステムということで評価されています。それぞれの持ち場で、しっかりと文化・教育・スポーツに関する役割を果たしたいと思っておりますが、今、もうひとつの柱として、あるいはそれ以上に、このサッカーを通じたブランドづくり、活性化が追求されています。

現在、プロ野球で日本シリーズに進出するチームを決めている最中です。かつて球団はほとんど東京と大阪にしかありませんでしたが、なんと今年のパ・リーグは、札幌と仙台と福岡の3チームで争っております。これはこの数年来の新しい動向だと思っております。それから、サッカーのJ1においても、依然として鹿嶋・静岡・神戸までを含んだ3大都市圏に比較的集中してはいますが、今、3大都市圏から離れたJ1チームとして、広島、大分、そして新潟と山形といった数年前まではあまり考えもつかなかった都市が大変活躍しております。おそらく人口40万から100万くらいの地方都市が活性化するには、サッカーはかなり決定的に大きな役割を果たしていると思います。こうした点では、北九州にもニューウェーブ北九州ができ、現在(10月18日)、JFL2位だそうですが、可能性が益々増えてきています。こうした点も踏まえまして、本日のシンポジウムを大きなきっかけにしたいと思います。新潟をいきなりJ1にもっていった池田会長から今日、その秘訣をお話していただけたと思います。



矢田 俊文 北九州市立大学学長

もうひとつ、本日のシンポジウムを主催した北九州市立大学都市政策研究所のこと、および北九州市立大学の学生グループが発表を行うことについてです。北九州市立大学は、教室内でのカリキュラムに沿った教育によって非常に質を上げておりますが、もう一つの狙いはオフキャンパスということで、キャンパスから飛び出たところで色々な活動をやりながら社会性を身につけていくという事をやっております。今日、頑張ってくださいとあります学生グループ「NavyWavy」も学生たちの主体的なグループでサッカーを応援して地域活性化しようという動きであります。都市政策研究所も本学が法人化してすぐに改組し、強化いたしました。北九州市をはじめとする都市の政策のブレーンの役割を担いつつありますし、また、こうした形で積極的に街に出て行って活性化する、というところなんです。今日は「北九州市立大学」主催ではなくて、「北九州市立大学都市政策研究所」主催というところにも、北九州市立大学の活力が見えてくるかと思っております。

今日は充実したディスカッションをしていただき、また明日から元気に動けるように期待しております。ありがとうございました。

2 基調講演「地域活性化とスポーツ」

池田 弘 氏 / (株)アルビレックス新潟会長、
NSG グループ代表

【 司会 】

それでは基調講演に移ります。はじめに、基調講演者の池田弘様をご紹介させていただきます。池田様のご略歴はお手元に配布したプログラムの 2 ページにお示ししております。愛宕神社宮司でいらっしゃる、現在は新潟県、福島県、東京都で 29 校の専門学校をはじめ、大学院大学、大学、高等学校、学習塾などの教育機関と医療・福祉施設を運営する NSG グループの代表をお務めでいらっしゃいます。また 1996 年に株式会社アルビレックス新潟代表取締役役に就任され、観客動員数を国内トップクラスまでに押し上げられました。2003 年には J2 リーグで優勝し J1 昇格を成し遂げ、地域密着型の新たなスポーツビジネスモデルを創造なさっておられます。今日は「地域活性化とスポーツ」と題しましてご講演いただきます。それでは池田様、よろしくお願ひします。

【 池田 弘 氏 】

《自己紹介》

大変貴重なシンポジウムに講演の機会をいただきまして、ありがとうございます。私は新潟からやってまいりました。新潟—福岡便というのは今年の 7 月まで 1 日 2 便、飛行機がございました。残念ながらその 2 便とも廃止するという話があり、半年間、搭乗率 70% を維持すれば 1 日 1 便は継続することになり、福岡の皆さんと新潟の皆さんが一生懸命がんばりまして、1 便だけ飛行機は残りました。ただ時間帯が残念ながら夕方なものですから、今日は大阪経由で来まして、本当に遠いと感じる移動になりました。こうした意味も含め、各地方都市が活性化することが、日本にとって大変大事なことだと改めて認識しています。中央が栄え、地方が寂れていくことになって日本が大きく衰退しているに違いないということに確信を持っており、そうした意味では矢田学長が政府への提言で先駆的な役割を果たされていることにつきまして大変尊敬し、新潟にも来ていただいてお話をいただいたことにもごさいます。先生が新潟でお生まれになったということもありまして、今回の講演のお話をいただいたことに関しまして、感激をしているところでございいます。

《教育事業の展開と地域活性化》

それでは、私の方では経験に基づいた話しかできませんが、お話をさせていただければと思います。今、ご紹介いただきましたように、新潟の繁華街にある小さなお宮の宮司をしております。お宮の後を継いで、周りの商店街や住民の方々の商売繁盛や健康を、お祓いを通してお祈りをするのが本来の私の役割です。ですが、新潟市のど真ん中、古町通りという繁華街ですが、どんどん寂しくなっていまして、そこのお宮の後を継ぐということについては大変思い悩んだのですが、代々続いているお宮だということもありまして、神主の修行をして田舎に帰ろうと決めました。ですが街の皆さんが中心街からどんどん郊外に家を建てられて出ていかれ、商店街もだんだんシャッター通りになっていました。残念ながらちようど 3 日前も、大和デパートという新潟のど真ん中にあるデパート、本社は金沢ですが、そこが撤退することとなりました。本当に街の一番ど真ん中、福岡で例えると天神にある岩田屋さんが撤退する、というような感じでしょうか。それよりももっと大打撃があると思っておりますが、そのように今、新潟の中心街が大変衰退をしています。その

近くにあるお宮の息子ということで、お宮を継いでも経済的に成り立つかどうかということに大変苦悩しました。その時に自分自身が何をやるかということを考え、お宮を継ぎながらできるということで、33年前に教育事業をはじめました。神社の関連事業という意味では、寺子屋という発想です。宮司をやりながら行う事業としては親和性があり、やりがいがありそうだということで始めました。その時、先輩たちのお宮やお寺は、だいたい幼稚園をやっておられ、地域が大変衰退していく中で苦しんでおられるところもありましたが、ちょうどその時に、専門学校制度が新しくできるという流れもございまして、専門学校、それから学習塾等々の教育事業を始め、時代の大きな波にうまく乗れ、事業を拡大できました。

さて、皆様、新潟にどのような印象をお持ちでしょうか。お酒、コシヒカリ、雪国、そんな感じでしょうか。実は新潟市は港町なのです。明治開港五港、横浜がちょうど150周年を迎えて大きなお祭りを先頃やりましたが、同じ頃、アメリカを中心に海外に向けて港を開きました。その時開いた港は、函館、横浜、神戸、長崎、それから新潟なのです。他の4つの港はすごく行ってみたい町、港町という気がするのではないのでしょうか。非常にロマンチックで外国の匂いがします。新潟もその時開港し、日本で初めてのイタリア料理店や日本で初めての英語学校も設立されました。残念ながら、信濃川に面した河口港ということで浅瀬であったことが影響し、だんだん船の数が少なくなり、どちらかというと満州国、今の東北三省、あるいは北朝鮮方面と大陸向けの港に変化してまいりました。拉致問題などのこともあり、新潟に明るいイメージや港町の印象はあまり無いでしょう。東京の人から見ると、川端康成の小説に「トンネルを越えると雪国だった」とあるように、越後湯沢のスキー場までは多くの人が来るのですが、新潟の街は若者たちが行ってみたい街、住んでみたい街ではないという印象があることを、新潟で色々な活動を行う中で感じてきました。

そこで、先ほど述べたような学校をどう絡めたのかをお話しします。私は専門学校を現在、新潟で24校開いています。考えられる専門学校はほとんどやっています。新潟発で、専門学校をお創りするコンサルタント事業もやっており、全国で100校以上指導させていただいています。福岡市のある専門学校グループも指導させていただきました。「Stop the 東京」と申しますか、「Stop the 中央」という概念で地方都市に専門学校を創立させ、個性のある専門学校を作っていこ

うと考えています。そして首都圏も含めて県外から15%の学生が新潟の私どもの専門学校に来ていただいています。どのような専門学校があるか少し紹介しますと、特殊なところでは、新潟にしかないスキー・スノーボードの専門学校、またアルビレックスとも連動しているサッカーの専門学校、これはおよそ9割の学生が県外から来てくれています。また、佐渡には文化・芸能の専門学校があります。また、介護の専門学校は日本でほぼ初めて創りました。なお、大学も創って9年目になります。

新潟にこうした専門学校、大学を創ってどう学生を呼ぶかという時に、大きなテーマとして、新潟が行ってみたい街、住んでみたい街になることが、すごく大事だと思いました。要するに新潟に都市のブランド力があることが大事だということを感じるようになって、青年会議所活動やら商工会議所活動を通しながら、新潟のブランド力をどのようにしたらを上げることができるのかというシンポジウムや各種イベントに参画をするようになりました。私はお宮をやっておりますので、氏子さんの健康・幸せや、地域の商売繁盛、商店・会社の繁栄ということをお祈りし、お祀りをするということは、常に私のミッションになるのです。こうした視点での新潟の街の活性化が、私のテーマになってきたのです。

学校を経営していると、やはり街が活性化するには若者が多くいる街でないといけないと思います。最近、団塊の世代に住んでもらおうということが話題になっていますが、やはり長期的に考えると、若者が中心になりながら街を形成していかなくてはならないと思います。新潟県全体で見ると、毎年、1万2~3千人の人口が減少しています。そのうちの8千人が若者であり、新潟県から流出し、東京を中心とした首都圏などへ移っていつているのです。人口減以上に高齢化の進行が課題になっています。それでもまだ、新潟はよい方であり、全国には本当に若者が住めなくなっている都市、地域が多くあります。日本は、個性ある地方都市から有能な人材が中央に集まり、そこで国の政をやることを140年やってきました。どんどん大量に、東京、太平洋側に集中が進んだことが大変な弊害になって、首都圏を中心に同一化社会が形成されています。このような国家は滅びていく、ということを確信しており、地方都市を活性化しなくてはならないと思います。そのためには若者を呼ばなければならない、ということを非常に強く思うようになりました。



池田 弘 氏

《ワールドカップ、Jリーグを新潟へ》

そのように思っているところ、サッカーのワールドカップ招致の話、そして新潟で開催を、という話題が出てきました。ただ、新潟の人の殆どはサッカーを知らない状態でした。もちろん、なんとなくイメージはありますが、雪国ですので、サッカーは本当に遠い世界の話でした。ただ、45年前に新潟国体があり、東京以外の道府県では初めて新潟県は天皇杯、皇后杯の双方で1位となることを成し遂げ、慣例を作りました。その時、全国から教員として色々なスポーツの優秀な人たちを集めました。県としてサッカーが普及していない中、ある一校の先生が45年前の新潟国体の時に招かれた群馬県出身のサッカー選手でした。その人の思いが少しずつ拡がり、ワールドカップを新潟で開催したいという思いが募り、行政を動かし、市民や県民を動かしてワールドカップ開催にこぎ着けたのです。「ワールドカップ開催を新潟で」という思いがあり、一方で、私みたいに「新潟を活性化したい、若者に目を向けてもらって、行ってみたい街、住んでみたい街に変化させたい」という思いがあったのです。北九州市も今、そのような状況なのかもしれません。こうして、私どももサッカーに取り組んで、色々と研究、勉強しているうちにJリーグがスタートしました。

日経新聞で毎週日曜日に「美味しいケーキ十傑」、「素敵な港町十傑」といったようなアンケート結果が掲載されています。その中に、「若い女性に聞きました。行ってみたい街の十傑」という企画が、Jリーグがスタートしたばかりの頃にありました。なんと、日本全国の都市の4位、京都、横浜、東京に伍しての4位に、茨城県の鹿嶋がなっていたのです。皆さんは鹿嶋をご存じですか。臨港工業地帯になっており、一方では農村地帯です。町の真ん中に広い国道が通っていて、かつては暴走族が毎晩集まるような地域でした。

農村地帯に工業が入ってきて若者たちが工場に働きにくる中、新住民と旧住民の軋轢もあったのでしょう。そこに鹿島アントラーズができたことによって、暴走族がいなくなって、みんなアントラーズの応援をするようになりました。また、農家のおばさん、おじさん達が、アントラーズの応援で国立競技場に赤いハチマキをしてメガホンを持って乗り込む姿が映像に出てくるようになりました。現在、鹿嶋市は合併して人口6~7万です。周辺市町村を合わせると30万人弱くらいのサポーターエリアです。その地域で、少し時間のある人はほとんどアントラーズの応援に行ったという伝説的な話があります。こうした映像が出ることによって、行ってみたい街の4位になったのです。「えっ」と思いますよね。鹿島神宮しかない臨港工業地帯です。しかし、スポーツが発信する力、特に現在のようメディアの時代になって映像が発信される力というのは、すごいものだと思います。そして、その都市のブランド作りになるのだ、ということを感じるようになりました。

私ども新潟がワールドカップ開催会場を誘致することについて、週刊誌やスポーツ新聞では、「新潟は絶対無理」だと報道されていました。最初は日本単独開催を目指していて、国内15~12箇所くらいの会場が想定され、その時はまだ新潟での開催の可能性があったかもしれませんが、日韓共同開催になり、国内10箇所になりまして、「もう新潟はない」というのが下馬評でした。

その経過の中で、アメリカでワールドカップが開催され、ロサンゼルスで準決勝、決勝がございました。その際、そこでFIFAの関係者にプロモーションをやるので、新潟も手を挙げているのだからブースを出してほしいと声がかかりました。知事を筆頭に経済人も含め30人くらいで勇んで行きました。その時、9万人収容のローズスタジアムでブラジル対スウェーデンの準決勝を見る機会があり、大変な身震いがしました。人が9万人も集まるという体験したことのない空間に身をおいたことに対する感動でしょうか。人々が熱狂する、異様な信じられない空間を体験することができました。こんな空間をもし新潟に再現できたら、つまりワールドカップを呼ぶことができたなら、新潟の人々にたいへん大きなインパクトを与えるに違いありません。せっかく手を挙げたのだから、わずかでも可能性があるのであれば是非誘致をしたい、と思いました。おそらくワールドカップの日本での開催の機会は、私の生きている間にはもう二度と無いのではない

か、と当時は思っていました。今現在は、次の次のワールドカップにもまた日本は誘致の手を挙げており、可能性は十分にあると思いますが、それはこれだけ日本サッカーが非常に活性化し、世界的にも注目を浴びるような国になりつつあることで可能性が広がったのだと思います。しかし当時は、もうこんなチャンスはないので是非呼びたい、と思いました。

しかし、下馬評だと「無理だ」ということでした。それはそうでしょう。サッカーがほとんど普及していません。サッカー協会に加盟している人数比率も桁違いに少ない。サッカー場もない。雪国なのでシーズンの半分くらいはサッカーができない。国際会議、特にスポーツに関する国際会議もやったことがない等々、色々なマイナス要因がありました。このため、下馬評の中では、評価されませんでした。致命傷だったのが、「Jリーグを目指すチームがない」ということでした。Jリーグが開幕しものすごく盛り上がりつつある中で、新潟がそのようなことができるのか、調べました。Jリーグを目指すチームがなければ、完全にワールドカップ開催候補地としては消滅するということでしたので、サッカー関係者も含め地域の皆さんが相談し調査しました。そして最終的に、「チャレンジしなければ私どもは後悔するに違いない」ということで、新潟のサッカー関係者および行政がJリーグを目指すチームを作ろうということになりました。「そんな社長を引き受けるのは池田しかいない」ということになったらしく、呼び出されて要請されました。私は新潟にワールドカップを誘致したいという非常に強い思いがございましたので、お引き受けをしました。

しかし案の定、そんなに簡単にいくものではありませんでした。その時に調べたら、仙台や札幌は行政が多額のお金を投入しているのです。それはそうでしょう。Jリーグは、大企業のチームに「毎年最低10億ずつ拠出すれば、10年間でお金はいらなくなるから」ということで説得してできたと言われていました。10億プラス色々な経費で1チーム20億ずつかけているのです。その20億円という予算をどのように構築するのかということを検討し、とにかくスタートしようということになりました。

そのような努力が実り、なんと新潟でのワールドカップ開催が決まる事になるわけです。この経緯もちょっと面白い話があります。Jリーグ、サッカー界が何を目指したかと言うと、世界トップレベルのサッカーを目指すという大きな目標がありますが、平行して、「スポーツは本来、地域密着で、地域と共にあるべき

だ」というヨーロッパの考え方・歴史を日本に持ち込もうとしたのです。Jリーグ100年構想には、地域の総合型スポーツクラブという概念が示されています。ヨーロッパが100年以上かけて、住民たちが少しずつ負担して行政と共にサッカーを中心として色々なスポーツが組み込まれた地域のクラブチームを作り、その頂点のチームがプロリーグを構成するということがスポーツであり方であると考え、それを目指したのです。ところが日本のスポーツは、実業団および学校スポーツが中心でした。しかし、ちょうどJリーグができた直後にバブルがはじけました。実業団のチームが次から次へと廃部になっていきました。そして今述べたような地域密着の理念を掲げたJリーグができた。そうすると、地方にもチャンスが出てきたのです。まさか私どもが、新潟でプロスポーツチームを持つことができるということは想像だにできませんでした。私の世代は、テレビを通して野球と相撲ぐらいしか見ることはできませんでした。新潟の人の大半はジャイアンツファンで、テレビでそれしか見ることができないものですから、そのように刷り込まれて育ってきました。しかし、鹿島の例のように、もしかしたら私どももプロスポーツチームを持つことができるかもしれないと期待を抱かせていただきました。

そして、ワールドカップ開催地の選考の最後で、なぜ新潟に決まったか、という点についてですが、全国津々浦々に地域密着の総合型スポーツクラブを作るという概念が、全国津々浦々にワールドカップ開催地を決める時に影響しました。選考では日本地図にバラをつけていくのです。北海道は札幌、九州は大分、それから宮城、鹿島、静岡、神戸等々と決まっていく中で、最後に名古屋と私ども新潟が争うことになりました。名古屋はトヨタカップを有するトヨタ自動車さんのお膝元で、当然名古屋に決まるということが下馬評で、誰もがそう思っていました。ところが、最後の最後に新潟が発言させてもらいました。先ほど述べたように、新潟国体の時に来られた先生が新潟の女性と結婚されて新潟に残られ、サッカーの普及に意地になって努めてこられたのですが、その方がサッカー協会の要職になっておられ、最後の場面で手を挙げました。「Jリーグの理念、また今回のワールドカップ招致の理念は何だったのでしょうか。全国津々浦々に総合型スポーツクラブをつくり、普及を図り、最終的に世界に届くサッカーを創るという理念だったでしょう。日本地図を見てください。北陸・信越地区、また日本海側に今回の開催地が1箇所も無いではないですか。それ

ではこの理念に反するのではないのでしょうか」という趣旨の発言があったと聞いております。その結果、名古屋を破って新潟開催が決まったということなのだそうです。細かなことはわかりませんが。

こうしてワールドカップの新潟開催が決まりました。チームが、北陸地区からチーム強化を始めて全国リーグへ行き、J2ができてそこに行く寸前で開催が決まったのです。集めた資本金も全部使い果たし、もうこれ以上やるのは難しいという状況でした。チームの存続について、「もうワールドカップ開催が決まり目的を果たしたから解散しよう」という多くのご意見もありました。しかし、新潟にとってワールドカップは1回開くと大きな花火が打ち上げられたような効果はあるかもしれませんが、一方で、このチームは新潟にとって継続的になくてはならないような存在になるのではなからうか、ということ私をはじめ何人かの経済人が感じるようになりました。「存続させたい」と非常に強く思うようになり、存続できる道を探り始めました。こうした事について、NHKをはじめ、いくつかのテレビ局に取材をいただき、それを編集したビデオがございますので、そのビデオを見たいと思います。また、地域密着のサッカーチームができれば、他のスポーツのチームもできるのではなからうかと思ひ、総合型スポーツクラブを最終的に完成させていきたいと今チャレンジしている映像もがございますので、併せてご覧いただければと思います。

《DVD「アルビレックスの軌跡」上映》

※内容紹介は割愛させていただきます。

《アルビレックス新潟による“新潟の奇跡”》

【池田 弘 氏】

映像をご覧いただきまして、ありがとうございます。さて、ワールドカップが新潟で開催され大変盛り上がりました。イングランドが決勝トーナメントに進出したので、会場となった新潟にベッカムも来ました。

しかし、4万2千人収容のスタジアムができ、それをアルビレックスがホームスタジアムとして使えるかどうかという議論も起きました。「平均 3,500 人くらいの観客のアルビレックス新潟が 4 万人のスタジアムをらせるわけがない」という意見が出ました。一部マスコミ等で、ワールドカップ開催で大規模なスタジアムをあの様な場所に作ったが“粗大ごみ”になるに違いない、という記事が出始めたのです。県も慌てて、新潟スタジアムの活性化委員会を作り、その

20 人くらいの一員としてアルビレックスも選ばれました。「さあ、42,300 人のスタジアムを何に使うのか」ということで、音楽イベントを開こうとか、陸上競技場も併設するので国際陸上大会を呼ぼうとか、色々な議論が始まりました。「アルビレックスも年に2~3回くらいは使わせてあげよう。しかし、観客席は1階部分の一部だけ使用してはどうか」という感じの話もありました。

さて、ワールドカップ開催の1年前に開催されるコンフェデレーションズカップの会場になっていたので、その前にスタジアムが完成しました。それで、こけら落としをやるにあたり、サッカースタジアムを作ったので、私どもは当然、アルビレックスの試合と、それに合わせたイベントに行政は予算をつけてくれるものだと思っていました。しかし予算は無く、スタジアムを満員にするイベントはこれしかない行政が苦肉の策で考えた案が、新潟県各地の民謡と踊りを集めた大会を開き、各地に人数を割り当てて参加してもらおうというものでした。それがこけら落としになりました。その時、予算が無いということに関して悔しくて悔しくてたまりませんでした。ワールドカップを誘致するためにこのチームを作ったのですが、さあこれからJ1を目指そうというチームを支援してただけのかけらの一つもないのではないか、という気もしました。

それで、私の脳裏では、「そうならば、アメリカでのワールドカップの時のローズスタジアムのように、新潟市民、県民でスタジアムを超過満員にすることを実践しよう」と思いました。そのための打開策として、皆さんに興味を持っていただくために、「新しいスタジアムができたので、見に行こう」という趣旨でスタジアム見学会を開催し、人々を無料で招待しました。スタジアム見学の後にサッカーの試合があるというイベントを組んだのです。スタジアムを見学した後、試合を見る前におじいちゃん、おばあちゃん方の中にはお帰りになろうとする方々もいらっしやったので、「ちょっと待ってください。申し訳ないですがサッカーを見てください。」と押しとどめました。新しいスタジアムということもあり、3万3千人の方々に来ていただきました。その時の試合は、J2の京都パープルサンガ戦でした。実力という点ではほとんど勝てない相手だったのですが、試合の最後の最後に追いつき延長になり結果的に負けはしましたが、その時の感動は大きいものでした。はじめは新潟の人たちはどのように応援するのかわからないのです。新潟も、今みたい

に「新潟」を応援するのではなく、フェアプレイに対して味方にも敵にも皆で拍手という感じでした。一方だけ応援するのは日本人の心情に合わないのではないか、という感じでした。しかし、試合の熱気がだんだん増してきて、新潟が最後に追いつき、結果として負けた時の悔しさから、「意外と面白いじゃないか」という雰囲気になりました。そこから始まり、皆さんが「このチームを財政的にも存続させよう」ということになりました。

他のJ1のチームをみると、多くは大企業の子会社のところでした。前述のように10年間10億ずつの補助金を出してもらいプロリーグとして成功させるというのが、Jリーグの状況でした。結果として浦和などは大成功しました。しかし、企業チーム的なところで現段階でも多額のスポンサー料が企業から出ている場合も多くあります。クラブチームでなんとか歯を食いしばってやっているところは、まず新潟です。それからJ1からJ2に落ちています、甲府もそうです。大分はサポートしていた企業があったのですが、今は地元密着のチームとして歯を食いしばって頑張っておられます。それから、地元で大企業が無いが成り立っているチームとして山形があります。行政が関与し公益法人が運営し、少ない予算の中でJ1で頑張っておられます。このように日本ではまだまだ少ないですが、新潟のようなところも出てきている状況です。

それでは、なぜ新潟のチームが存続できたか、という点です。「広く薄く」支えるしか方法がない、ということが原点に戻したのです。県内全域に後援会を作ってまいりました。今、後援会にはサポーターを含めて1万5千ぐらいのファミリーの方々が所属していただいております。J1開幕と同時に2万2千席分のシーズンパスを売り、その方々を中心にすぐ完売しました。現在は少し漸減していますが、それでも昨日の浦和戦は負けはしたものの4万人の観客でした。皆さん本当に悔しい思いをされ、多分今日は皆さん気持ちが沈んでおられると思うのですが、そうやって文句を言いながら楽しんでいただいている、という感じだと思います。以前、ヨーロッパのチームのことを調べた際、60~70歳ぐらいの老夫婦が胸にシーズンパスをぶら下げて、「このシーズンパスが私どものファミリーの宝です。100年以上も前に先祖が購入した地元スタジアムの席をずっと毎年買い続けているのです。」とおっしゃっている資料がありました。その時、「地元密着のファミリーが、このチームと共にファミリーの歴史を刻んできたに違いない。」ということに気づきま

した。それだけサッカーのクラブチームが地域の皆さんと密着している。その地域の1ファミリー1ファミリーが支えることによって、クラブチームが成り立っている、ということです。それしか方法が無いのだということが、改めてわかりました。それで「新潟はその方法でいくしかない」ということで進めてきました。

スペインのバルセロナというチームは、12万ファミリーが支えているのだそうです。私どもは、本当に地域思いの亀田製菓さんがスポンサーになっていただき、企業が厳しい時も会社のオーナーである会長さんが、社員を集めて「ボーナスは削らせてもらうが、このことに関しては地域貢献なのでこのまま続けたいので了解してほしい。」と社員皆さんの前でお願いをしていただいたこともあるそうです。今、亀田製菓さんはたいへん業績が良く、継続してスポンサーをやっていると思います。バルセロナのユニフォームのロゴには何がついていると思いますか。ユニセフなのです。市民の誇りなのですね。なおかつ、年間1億円以上、複数年契約でバルセロナがユニセフに寄付をするのです。寄付をしてロゴをつけて、それが市民の誇りになっているのです。従って、スポーツチームは、ある面で、その地域の誇りをみんなの力で育てていくという構造を作ったチームが勝つと私は思っています。巨額の予算を持つチームに、その何分の一かの予算の新潟が良い試合をできるのです。昨日の4万人の観客のうち、浦和のサポーターは約8千人、新潟は約3万2千人です。3万2千のサポーター達が思いを寄せることによって、地元の試合は圧倒的に勝率が良くなります。それだけ地域の人の思いがチーム・選手達に伝わり、互いに感動を与えるような状況になってきています。

こうした意味で、この北九州でチームをお持ちになり、皆さんで広く薄く支えていこうということは、色々な意味で相乗効果があると思います。新潟が行ってみたい街、住んでみたい街としてどのぐらいの印象度を与えることになったか、まだ私にはわかりませんが、新潟の名前がスポーツニュース、新聞等で最近、かなり出るようになりました。こうしたことが毎年毎年繰り返されることによって、間違いなく印象度は高まると思います。その副次的効果として、ジュニア、ジュニアユースなどのほとんどの世代の日本代表候補にアルビレックス新潟の選手が出始めていますし、代表のレギュラーになるようになってきました。

それだけ、地域に対して大きなインパクトを与えているということをご報告させていただきまして、私か

らのお話とさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

3 北九州市立大学生における関連研究・活動報告

「Jリーグチームと大学の連携に関する研究」

学生グループ「NavyWavy」 /

荒金 正和 経済学部 経営情報学科 3年
下田 真奈美 外国語学部 中国学科 3年
調 真希 文学部 人間関係学科 3年
杉山 紗希江 文学部 比較文化学科 3年
中村 祥子 外国語学部 中国学科 3年
林田 隆太郎 外国語学部 国際関係学科 2年
山下 千里 経済学部 経済学科 3年

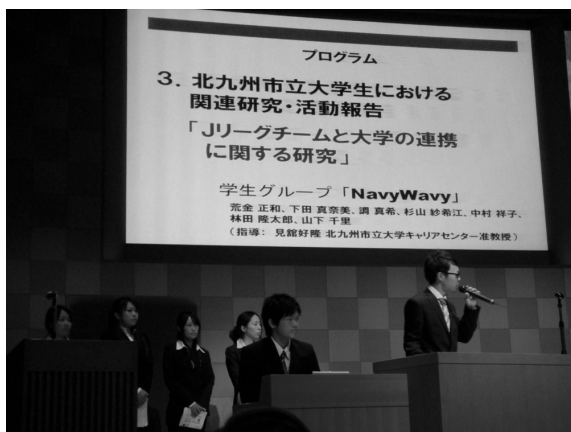
【司会】

それでは続きまして学生グループ「NavyWavy」による研究発表「Jリーグチームと大学の連携に関する研究」を行います。

【林田 隆太郎】

私たち NavyWavy から「Jリーグチームと大学の連携に関する研究結果」を報告いたします。まずはじめに、私達 NavyWavy のことを簡単に紹介させていただきます。私達 NavyWavy は 2007 年にニューウェーブ北九州観客動員数増加プロジェクトチームとして誕生しました。そして翌年 2008 年には小学生向けの「ニューウェーブだより」を作成し、今年 2009 年からはラジオに出演するなど年々活動の幅を広げていております。では、私たち、常に成長を続ける NavyWavy から Jリーグチームと大学の連携に関する研究結果を報告いたします。

(以下、研究結果は第 3 章に掲載しているため省略。)



学生グループ「NavyWavy」

4 パネルディスカッション

「スポーツを通じた北九州地域の活性化」

パネリスト(五十音順): ※役職は 2009 年 10 月 18 日時点のもの

小松 真氏 / 北九州市企画文化局 文化スポーツ部長

中村 真人氏 / ニューウェーブ北九州後援会会長、北九州商工会議所副会頭(株)井筒屋代表取締役社長

傍士 銚太氏 / Jリーグ理事、(財)日本経済研究所 専務理事

真鍋 和博 / 北九州市立大学地域創生学群 准教授(都市政策研究所 特別研究員)

山木戸 祥子氏 / ニューウェーブ北九州 市民ボランティア

横手 敏夫氏 / (株)ニューウェーブ北九州 代表取締役社長

コーディネーター:

南 博 / 北九州市立大学都市政策研究所 准教授

【南 博 准教授】

シンポジウム後半のパネルディスカッションでは、「スポーツを通じた北九州地域の活性化」をテーマといたしまして、様々な形でスポーツに関わっておりますパネリストの皆様方からお話を伺いたと思います。先ほどの基調講演において、池田会長から新潟の大変貴重で重要な事例をご紹介いただきました。スポーツは地域に実に様々な効果をもたらすことが期待されます。今後の北九州地域の活性化に関しても、やはり極めて重要な要素ではないかと考えております。そこで、地域にスポーツチームがあることの有用性、あるいはスポーツと地域との関わり方といったことについて、ここでは議論していきたいと思っております。

《北九州地域におけるスポーツの現状等》

【南 博 准教授】

さて、過去から現在にかけて、この北九州地域でもスポーツは地域の活力の向上に様々な形で関わってきたと思います。そして、これから将来に向けてもそれは変わらないと思っておりますし、また新たに大きなステップをこれから踏み出すという段階だと思っております。

そこでまず始めに、北九州地域におけるスポーツの現状等について考えてみたいと思っております。この点につきまして、まず行政のお立場から小松さんにお話をいただきたいと思っております。

【小松 真 氏】

それでは、これからパネルディスカッションを行うにあたり、まず私の方から、北九州市のスポーツの現状等についてご報告させていただきたいと思います。北九州市は非常にスポーツの盛んな街でございます。特に古くから実業団スポーツは極めて活発に行われていました。例をあげますと、北九州市が合併して誕生した翌年の昭和 39 年の東京オリンピックでは、マラソンの君原健二さんや水泳の福井誠さんをはじめ、総勢 23 名の選手・コーチを送り出した街です。オリンピック以外にも、八幡製鐵所をはじめとする実業団チームや選手が、陸上、水泳、野球、バレーボール、ラグビー、サッカーなど様々な分野で輝かしい実績をあげてきた街でもあります。少し事例を紹介しますと、例えば都市対抗野球では、八幡製鐵所野球部が 2 回の優勝、また門鉄野球部が 1 回の優勝を誇っております。またラグビーでは、八幡製鐵所のラグビー部が昭和 30 年から 12 年間の間に、全国社会人大会で 9 回の優勝という偉業を達成しています。サッカーでは、八幡製鐵所のサッカー部が天皇杯優勝 1 回、準優勝 3 回という輝かしい実績がございます。本当に枚挙に暇がありません。北九州市は多くのオリンピック選手やトップアスリートを輩出し、我が国のスポーツ界をリードしてきた街であったと言えるのではないかと思います。

ただ、時代と共に北九州市を取り巻くスポーツシーンも徐々に変わりました。これを 3 つの視点から見ると、本市の現在の状況が少し見えてくるのではないかと思います。

まず、第一の視点は、「競技スポーツの視点」です。北九州の実業団スポーツの黄金期は、昭和 40 年代の前半までです。それ以降については、産業構造の転換、また鉄冷え等によって実業団スポーツは徐々に勢いを失ってきました。しかし、「街の DNA」というものがあるようで、現在でも競技スポーツは非常に盛んです。例えば市内のスポーツ人口、この把握は非常に難しいのですが、北九州市体育協会には 36 競技団体が加盟しており、その構成チームは約 2,200、構成登録人員は約 118,000 にのぼっています。先月末に行われました県民体育大会でも、北九州市は総合 1 位となって現在 3 連覇中です。また、去年の北京オリンピックには、女子バレーボールの竹下選手をはじめ 7 名の本市ゆかりの選手が出場を果たしております。さらに今年、都大路の全国高校駅伝に北九州市立高校が出場、夏の甲子園に九州国際大学付属高校が出場する等、高

校のスポーツにおいても頑張りを見せているところです。ただ、残念ながら、スポーツ人材が市外へ流出する傾向も顕著です。かつて盛んであった企業スポーツの衰退という事もあり、選手の受け皿が少なくなってきたためと考えられます。象徴的な事例では、北京オリンピックに出場した本市ゆかりの選手 7 人のうち、市内在住者は自転車競技の北津留翼選手 1 人だけでした。一方、昭和 39 年の東京オリンピックの本市ゆかりの選手は全員八幡製鐵所所属の地元在住の選手でした。選手の受け皿づくりについてはなかなか妙案は無いですが、街をあげて真剣に考えなければならない時期に来ているのではないかという思いもあります。新しい取り組みも始まっており、ルネッサンスクラブという硬式野球チームが、有志により平成 18 年に設立されています。硬式野球を続けたいという熱い思いの選手の受け皿となっており、クラブチームの全国大会に出場するなど活躍しています。これは受け皿づくりを考える上で、先駆的な取り組みではないかと考えています。また、ニューウェーブ北九州も、選手の受け皿の一つとして非常に期待できる存在の一つではないかと思っています。

二つめの視点は、「生涯スポーツの視点」です。アスリートではなく、一般の方が主に取り組むスポーツという視点で見ると、健康づくり、生きがいつくり、仲間づくりという事で、ますます盛んになっています。特に、昨今のメタボ対策ということもあって、中高年の方のスポーツへの取り組みは、極めて顕著です。昨年 11 月に、スポーツ実態調査を行いました。その中で、週 1 回以上スポーツをする人の割合が 52% と半数を超えました。ちなみに平成 16 年の調査では 39% であり、わずか 4 年間に 13 ポイントもアップしています。内訳を見ると、ウォーキングや体操など、いわば簡単に取り組めるものが多くなっています。これは健康志向の高まりによるものと思われます。行政といたしましても、こうした傾向は非常に好ましいことと受け止めており、誰もが、いつでも、どこでも、いつまでも、スポーツを楽しむことができるよう、またスポーツの裾野を広げ、さらには地域コミュニティの絆を強めて健康で元気な街にするために、環境整備をはじめ様々な施策に取り組んでいきたいと思っています。

最後に三つめの視点ですが、これは「観せるスポーツ」という、新たな視点です。最近ではより高いレベルの競技を観せるという視点も出てまいりました。野球は古くからプロ野球がございましたけれども、サッカー



小松 真 氏

一もプロリーグである Jリーグが 1993 年にでき、バスケットボールも 2005 年に bj リーグができました。バレーボールもプロリーグではございませんが Vリーグ、ラグビーもトップリーグなどがつくられました。スポーツを観る人に、夢と感動、希望を与えると共に、応援を通した一体感をつくるという状況が出てきました。また一方では興業という側面も強く打ち出されてきたと思っています。プロチームあるいはプロチーム的なチームという点では、北九州市は政令指定都市の中で、唯一そうしたチームが無い街です。サッカーのニューウェーブ北九州は現在、プロリーグである Jリーグへの昇格を目指しているところですが、「北九州市にプロチームの誕生を」という機運は、現在、大いに高まっているのではないかと感じています。

以上、本市の状況について、競技スポーツ、生涯スポーツ、観せるスポーツという観点からご説明させていただきました。

【南 博 准教授】

ありがとうございました。次に、若干、北九州市立大学の PR じみたお話しになってしまいますが、今年度から地域創生学群という、新しい学部組織がスタートしております。そこでは、スポーツや福祉分野のボランティア活動も学ぶことができます。その他、本学ではスポーツの実践や、地域スポーツの振興に対する支援にも取り組んでいます。こうした点について、真鍋さんの方からご紹介いただければと思います。

【真鍋 和博 准教授】

先ほどの学生の発表はいかがでしたでしょうか。本学キャリアセンターの見館先生の指導が浸透し、なかなか上手くできたのではないかと思います。あのような活動も教育の一環としてやっております。少し振り

返ってみますと、そもそも大学のキャリアセンターというところは、就職活動の支援を行うところです。大学生の就職活動といえば、だいたい 3 年生の後半くらいから始まります。ただ、就職活動のノウハウといったものだけを教えればよいのかという疑問がありました。もう少し、そこに至るまでの色々な人間的な成長や経験が重要ではないかと考え、こういったプロジェクトを通じた学生の成長の支援を行ってまいりました。ちょうど 3 年前、ニューウェーブ北九州さんにこうした話をさせていただいたところ、「観客動員をなんとかしてくれないか」という話がありまして、「それではやりましょう」ということで始めたのがきっかけです。こういった活動によって、学生が色々な経験をして、人間的な成長も得られるという成果が分かってきましたので、こうした点もふまえて、学外の地域活動を教育プログラムの一部に取り込んでいく地域創生学群を今年の 4 月に本学は立ち上げました。

多少ちょっと宣伝的なところもございますが、どのような理念かということをお紹介させていただきます。地域の再生と創造を担う人材を育成するというのが、理念の一番大きなところですね。地域の再生と創造、この言葉から採って「創生」という言葉を作らせていただいたのですが、こうした理念を持っています。この理念の下、地域マネジメントコース、地域福祉コース、地域ボランティア養成コースという 3 つのコースを設けています。地域マネジメントコースは、地域の中で幅広く、行政機関も含め、将来活躍できる人材を育成します。地域福祉コースは、主に福祉分野で活躍できる人材を育てます。地域ボランティア養成コースは、将来的な就職というよりは、今、学生自身が持っている得意なもの、ダンス・歌・踊りなども含め、得意分野があるわけですが、それを何らかの形で地域の中で活かしていく活かし方を学びましょうというコースになっています。従って、就職というものをあまり意識していないコースとも言えます。

この 3 つのコースで今年の 4 月からスタートしているわけですが、特徴として 2 つ挙げますと、まず 1 年生の時から、実習と演習をやっていきます。通常、実習や演習は 2 年次から、場合によっては 3 年次からという大学が多いのですが、地域創生学群は 1 年次からこれを徹底してやっています。それから、昼と夜に授業が開講されており、社会人の方にも来ていただいています。社会人特別選抜を用意しておりますので、社会人の方でも、夜仕事が終わってから学べるような環境を準備しています。興味がある方は是非、出願して

ください。さて、1年次からの実習、演習について少し御紹介させていただきますが、実は実習が単位になるのは2年次からになっています。ただ、いきなり地域に出て行って実習しても、マナーや物事の進め方について、また、コミュニケーションに関する問題があると考えられます。地域の方々に御迷惑をおかけすることもあるだろうということで、1年次には単位にならない「指導的実習プログラム」としています。学生達が多岐にわたる領域で実習をさせていただいています。その中にはスポーツ関係のものもごございます。例えば障害者のスポーツ大会の支援をさせていただいたり、あるいは市内のNPOさんの御協力をいただきまして、シニアスポーツに学生達が関わっていくものもあります。それからスポーツ教室に学生がボランティアで参加するというを行っています。

それでは、なぜ、こうしたことを大学で取り組んでいるのかお話ししたいと思います。「学士力」という言葉をご存知でしょうか。文部科学省の中央教育審議会が昨年の暮れにまとめ、各大学に示しました。大学を卒業する時にはこういった力を身につけさせてください、というものです。この背景には、皆様方もひょっとしたら感じておられるかもしれませんが、「大学で学んだ勉強は、社会で役に立たないのではないか」という批判があるのではないかと思います。その「学士力」として身につけさせるものの中には、教室の中で先生の話を聞いてレポートを書くということだけでは身につかないものがたくさんあります。ここに、地域の中で実習をさせていただく意義があるのだと考えています。そういったものに学生が主体的に関わることによって、学士力を身につける一つの機会になっているのではないかと考えています。その中に、スポーツというものが大きなキーワードとして入っているのです。



北
真鍋 和博 准教授

《スポーツを通じた地域の活性化》

【南博 准教授】

ありがとうございます。今、お二方から、北九州におけるスポーツ振興の一例ということでお話しをいただきましたが、現在、北九州をホームタウンとして活動をしているチームとして、サッカーのJリーグへ加盟を目指しているニューウェーブ北九州の活躍が目を引きまします。そこで、これからは、事例としてニューウェーブ北九州を取り上げ、スポーツによる地域活性化の効果を考えてみたいと思います。この検討に際し、まず最初に、地域に根ざしたスポーツクラブを核としたスポーツ文化の振興活動に長らく取り組んでおられます、傍士Jリーグ理事から、「スポーツを通じた北九州地域の活性化」という観点から、少しまとまった時間、論題提起をいただきたいと思ひます。宜しくお願いします。

【傍士 銃太氏】

先ほどの小松部長のお話にもありましたように北九州は非常にスポーツが盛んな所だったのに、なぜこうしたシンポジウムを開かなくてはならないのかという、そこの部分から考えてみたいと思ひます。

地域活性化をテーマにしたシンポジウムは多いのですが、この地域活性化というものは一体何なのだろうと考えた時、やはりその源泉は「コミュニケーション」ということではないだろうかと思ひます。従って、「スポーツと地域活性化」というテーマの場合、「スポーツとコミュニケーション」、あるいは「スポーツが持つコミュニケーション能力」が地域にどのように影響を与えているのかということ、最近では考えています。先ほど、非常に優秀な学生さん達に、私が今日言おうとしていた事2つに、たいへん繋がる話をしていただきました。まず最初に大事な事は、「活性化するのは人間である」ということです。先ほどの発表では「キーパーソン」とおっしゃっていましたが、まさにその通りであり、人間が考え方を変えない限り活性化はしないのです。だから、人間がどのようなコミュニケーションをするかという点、そこが一番の基だと思ひます。

20年前にベルリンの壁が崩壊しましたが、コミュニケーションというものの一番大事な事は「壁」なのです。「壁」を取り払えば、いくらでもコミュニケーションできるのです。スポーツにもたくさん壁があります。スポーツの「ベルリンの壁」が崩壊したのも1990年代で、まさに同じ頃なのです。Jリーグがで

きたのはその頃です。始まったのは1993年ですが、Jリーグが構想されたのは1989年で、「ベルリンの壁」崩壊と同じ時なのです。これまでの、教育を目的とした体育という壁、あるいは学校・企業の広告塔の手段として使われてきたスポーツという壁を取り払ったのは、地域単位でスポーツをやる、あるいは総合型スポーツクラブで、日常生活においてスポーツができる、という考え方でした。また、長らくアマチュアのオリンピックだったものが、サッカーでも23歳以下でプロが出てよいという形になったのも、まさにこの頃です。プロフェッショナルというものに対しての見方が変わりました。1990年に衛星放送が世界的にスタートして、世界のプロフェッショナルなスポーツを生でどのような種目でも見るできるようになったということは、スポーツの壁を取り払った大きな出来事でした。それによって、子ども達の夢が、大きく世界中に広がったのです。サッカー選手においても「あそこでプレーしたい」ということで、どんどん世界に出て行き、それをメディアが追いかけています。野球においても、「なぜ日本のスポーツニュースで、“まずは大リーグ”という事から始まらなくてはならないのか」という、そういう事も起きているのです。また、12球団でまとまっていて北九州が入りたくても入れない、国民的娯楽であるプロ野球ですら、今のパ・リーグのように、地域スポーツ化しているのです。こういう状況まで来ているのです。「スポーツの色々な壁」が、今、取り払われることによって、活性化していると言えるでしょう。

さて、ニューウェーブ北九州のように地元でプロチームができる、地域に根ざしたクラブができると、それを人は「ホームチーム」と呼ぶわけです。この「ホーム」という言葉も、実はJリーグが始まるまではあまり使われませんでした。「ホーム」というのは、家庭、家族という単語ですけども、「ホーム」チームを皆さんは応援しているわけです。そして「ホーム」での試合をホームゲームと呼んだり、あるいはホームスタジアムと呼ぶわけです。「ホームを応援する」という形でも使います。とにかく、「ホーム」という言葉が全部に使われ、それが皆さんで共通した時間、共有できる空間になり、ホームタウンという言葉で言われるようになるわけです。そこまで来ると、みんなはもう単にサッカーといった一種目よりも、街を愛するというレベルになります。新潟もそういうレベルになっていると思います。そうすると、街を汚してはいけないということでマナーも良くなったり、街の名を汚

していけないということになるわけです。例えば北九州ナンバーの車が県外で空き缶をポンと捨てたなら、「北九州の人はひどい人たちだ」と後ろから言われる、という様な事を背負うようになるわけです。そうすると、「スポーツと地域活性化」というよりは、「スポーツと街づくり」のような言葉が生まれるのではないかと思います。そして、今度は自分達の街を愛するというので、何か手伝いたい、関わりたいという人が、どんどん出現してきます。

地域に自分達のプロスポーツがあると、どんな力が発揮されるか、という点について、二つ申し上げます。一つは、いわゆる「地域の求心力」です。誇り、アイデンティティとも言います。「ご出身はどちらですか？」と尋ねた時に、例えば浜松の隣に磐田があるんですが、かつては正直に言えず「浜松です」と答えていた人たちが今、「磐田です」と答えるようになるわけです。そのように、地名がどんどん象徴になってきます。それから、ライバルの存在は、非常に良いことです。北九州には、やはり福岡があることが大事なのです。ライバルの存在があると、その地域の求心力はますます発揮されます。浦和と大宮というのは、昔からライバルだったのです。そして、互いのライバルとの試合の方が、東京と試合をするよりもよほど重要なことになってくるわけです。そうした求心力のある街には、地域通貨が有効なのです。例えば「1ニューウェーブ」という通貨を北九州で作って、それが市内一円で、また井筒屋さんでも使えることになれば、どんな電子マネーより、「ニューウェーブと一緒にいたい」という気持ちがあるから皆が地域通貨を持つようになるのではないのでしょうか。求心力の無い所に地域通貨を導入しても、誰もそれを使ってわざわざ買い物はしないと思います。

それから、二つ目の力が、「繋げる力」です。よく地方に行くと、「いや、うちの地域は野球だ」とか、「うちは武道だ」とか、そうやって壁を向こうからどんどん作ってこられることがあります。僕らはどちらかという壁をどうやって取り払うかということをやります。「それも結構です。だからその上の、“北九州”をみんなで応援しましょう。それならば、もう競技種目云々も無くなるでしょう」と言うわけです。「繋げる力」が必要だと思います。北九州の場合は45年前に5つの市が合併したわけですが、地域それぞれで色々なお祭りをやることは非常に大事なことです。一方で、ひとつになるものも必要であり、これがニューウェーブ北九州だと思っています。先ほど

の池田さんのお話にあったように、新潟では6種目もアルビレックスという名前で、同じチームカラーで活動しています。「俺は野球だ」とか、「バスケだ」などと言っている人がいないのです。それから仙台も、今はプロ野球の楽天が注目されていますが、楽天だけではなく、ベガルタ仙台もJ1が目の前にある状況となり、相乗効果を発揮しているのです。実はベガルタ仙台があったから、楽天は仙台の地を選んだとおっしゃっています。つまり地域密着の実績がある所でスポーツをやれば成功するという考え方です。「チーム北九州」ということで、皆が種目を越えて繋がるということが大事です。

もう一つは、人自身も繋がりをみせるということです。市民、ボランティアもそうです。来月、全国ホームタウンサミットが新潟で行われます。Jリーグのボランティア組織が各クラブにあって、その組織が年1回一同に介して勉強会をするのです。非常にまじめな会で、今年で10回目になります。去年は山形、その前が柏という形でずっとやっていたりして、今年は新潟です。是非、北九州からも準加盟として参加していたらいいと思います。

人の交わりでは、Jリーグに「スポーツ観光」というものが存在しているのです。プロ野球の場合、毎日のように試合があるので、地元から毎試合何千人も応援に行くことはありません。Jリーグの場合、基調講演で池田さんがおっしゃっていたように、浦和から新潟に8千人来た、ということが起こります。私も浦和を調べたことがありますが、仙台、新潟、鹿島あたりには8千人規模で移動しています。この前、大分に確か5~6千人が来ていたと思います。2時間の試合に対してこれだけの人数が来て、あとは観戦以外に何をするかというと、飲んで、食べて、物を買って、宿泊して、ということになり、つまり観光客と同じなのです。これを地域経済活性化と言うかどうか知りませんが、こうしたことが継続すると、ひょっとしたら新潟空港と北九州空港の間にいずれ飛行機が飛ぶことになるなど、交流が深まる源泉になるのかもしれない。

「外の世界と繋がる」、あるいは「ワールドワイドに繋がる」可能性をプロスポーツは秘めています。アジアチャンピオンズリーグ、それから世界中のクラブで競うトヨタカップに出場することができる可能性が常にあるわけです。ですから、北九州という名前が、数年後には全世界200カ国以上に放映される可能性はあるのです。こうしたことが、先ほど学長がおっしゃった「地域ブランド」につながっていくのではない



傍士 銃太 氏

かと考えております。

また、最近J2では、非常に地味な活動をしていて、ホームチームとアウェイチームに関連する物産展をスタジアムの周りで開催させてもらう取り組みを盛んに行っています。あるいは、北関東の水戸、栃木、草津の3チームで独自に北関東カップを創ることもやっています。九州は5チームありますので、可能ではないでしょうか。こうしたことが、どんどん「繋がる力」になっていくのではないかと思います。

さて、Jリーグを目指すということで、皆さんは頑張っておられます。それでは、Jリーグのある街に共通する「街の表情」とは、どのようなものでしょうか。そこには、「繋がりのある空間」、「試合の記憶を共有する場」があるというだけではなく、そこには「スポーツを愛する人たちが暮らしている」ということです。例えばオリンピックの招致でも、スポーツを愛する表情を見せる、ということは大きなポイントであると思います。スポーツを愛する人たちがたくさん暮らしている。あるいはスポーツを楽しんでいる人たちがたくさん暮らしている。もっと言えば、スポーツを語っている人たちがたくさん暮らしている。「うちのチームはね…」、「私の街はね…」という表現をする人たちがたくさん暮らしている。そういうことだろうと思います。私はドイツに3年住んでいましたが、どの街へ行っても、こうした意識がすごく強かったと思います。そして、その基になるのが文化でした。スポーツに限らず何かあるのです。音楽だったり博物館だったり美術館だったり、そういうものがあって、「うちの街はね…」、「うちのチームはね…」という言葉が自然に出ていました。

最後に、先ほどの学生のみなさんの発表にもあった「双方にメリットがある」ということは、非常に重要な点だと思います。「自分さえよければいい」「自分だ

「儲かればいい」という人たちがばかりが住んでいると、双方にメリットということは有り得ません。そうではなくて、「あなたさえよければ」という、互恵の念に満ちた、互いに自分の持っているものを出し合うという事が、自分の街にプロスポーツがあり、それに関わるということではないかと思えます。

《市民、経済界の立場からみたニューウェーブ北九州》

【南博准教授】

ありがとうございました。非常に示唆に富むお話をいただきました。スポーツはまちづくりそのものであり、あるいは人間がその鍵を握っているのだ、というお話しであったかと思えます。そこで本日は、パネリストに市民・経済界のお立場からニューウェーブ北九州を支えておられるお二方に御登壇いただきありがとうございます。これからそのお二方に、ニューウェーブ北九州の存在意義をどのようにお考えになっておられるか、あるいはどのような期待をもっておられるのかという点、それから、現在、市民ボランティアあるいはニューウェーブ北九州後援会ということで、様々な支援活動を行っておられますので、そのご紹介もいただきながら、お話をいただきたいと思えます。まず、市民のお立場ということで山木戸さんをお願いいたします。

【山木戸祥子氏】

本日は市民ボランティアの代表としてこの場に立たせていただいているわけですが、実は長い間、このボランティア活動をしているわけではなく、このニューウェーブのボランティアに参加するようになったのは、2009年からです。それでは、それまで何をしていたかという点、もっぱらスタジアムに足を運んで応援する、ということだったのですが、試合を見ている中で、「もっと自分がこのチームのために何かできないか」と考えた時に、ボランティアのスタッフが不足しているということを知り、すぐに登録をしまして活動するようになりました。現在の業務内容は、主にチケット販売のブースで当日券のチケットを販売したり、サポーターズクラブの入会の受付ブースで受付をしていたり、あとはハーフタイムに行われる抽選会で賞品が当たった方に対する賞品の受け渡しなどを主に行っています。

ニューウェーブ北九州というチームの存在を知ったのは、多分5年か6年くらい前だったと思うのですが、当時は「仕事をしながら、選手たちが練習



山木戸 祥子 氏

している」という話を聞いて、自分が住んでいる家の近くで練習していたので、時々、その練習を見に行くことはしていたのですが、実際に試合を見に行くかという点、まだ何かそういう気分にはなれない、という感じでした。やはり、福岡にアビスパ福岡というJリーグのチームがありますので、アビスパの応援に行っていました。そして、そのアビスパの試合を見に行く中で思っていたのは、アビスパのサポーターの方ももちろん、すごく遠くの地域、浦和とか磐田とか、そういった地域からも福岡にたくさん足を運んで応援してくれる人達がいたわけです。「自分の住む街にも、そうやって応援できるチームがあればいいな」と、本当に常々感じていました。今年やっとJ2昇格が現実味を帯びてきたわけですが、仮にJ2に昇格したら、次はJ1に昇格する可能性があります。もっと言うと、先ほど傍士さんのお話にもありましたが、アジアチャンピオンズリーグにニューウェーブ北九州が出場する可能性ももちろんあります。そして、このニューウェーブ北九州というチームの中から日本代表の選手が選出されるとか、海外に移籍して活躍する選手が出てくるのではないかと、もっとも先の話だとは思いますが、私はすごく期待しています。まだ何も始まっていないかもしれないですけど、本当にすごく将来があるチームだと思って、これからもずっと応援していきたいと思っています。

今後期待することとしては、ここ1、2年だけの目先のことではなく、10年、15年先のことも考えて、若い世代の育成にもっともっと力を入れてほしい、ということ強く思います。今、チームに北九州出身の選手というのは、たぶん1、2名しかいないと思うのですが、北九州出身で現在Jリーグで活躍している選手はたくさんいると思います。その北九州出身の選手がニューウェーブ北九州で活躍してほしい、という思

いがすごくありますので、今後、若い世代の育成には力をいれてほしいです。それから、現在、ニューウェーブガールズというチームがあると思いますが、やはりそのように女の子達が活躍できる場がもっともって増えてほしいと思っていますし、ニューウェーブガールズは今、成績が良いと聞いていますので、その選手達の活躍をもっともっとクローズアップしてほしいと思います。以上です。

【南博 准教授】

ありがとうございました。それでは続きまして、経済界、それからニューウェーブ北九州の後援会というお立場から、中村さんにお話しいただきたいと思います。

【中村 真人 氏】

ニューウェーブ北九州後援会の会長（注：2009年10月時点）を仰せつかっております中村でございます。

後援会は、ニューウェーブを応援する法人会員による組織です。個人のかたはサポーターズクラブの方にお入りいただく形になっています。現在、後援会は239社が会員となっています。平成19年度が174、20年度が230、本年度が239とメンバーが伸びています。もう一息伸びないといけないと思っています。今年度の主な活動内容は、顧客増加に関するミーティングの実施や、9月にニューウェーブも財政的に苦勞しており遠征も大変だということで、会員から後援会費としていただいたお金をお渡しした次第です。

後援会は、ニューウェーブのJリーグ入りを目指そう、「おらが街」からJチームを出そう、ということを大きな目標にしておりますので、後援会ができた平成19年度に激励会を2回やりました。2回目は20年

3月に行いましたが、この時は名選手であった釜本さんに快く来ていただいて、その威力で278名がお越しになりました。後援会の活動が本当に活発であるか、という点については自分自身反省することが大でありますけれども、このチームを育てて、Jリーグに送り込むということでございますので、是非、ご参加をいただきたいと思います。

私とニューウェーブとの関わり合いは、5年くらい前になりますが、NPO法人でささやかに地域リーグでニューウェーブが活動しておられた時です。その時、この北九州の中で、「おらが街・北九州」と連呼できるものは全く何もありませんでした。「北九州はどこにあるのかよくわからない」「北九州というのは北部九州の代名詞でしょう」と言われることがあるのは、皆さま方もご体験されていると思います。これは5市の大同合併でできた市といういきさつがありますから、やむを得ないことではあります。合併から45年経って北九州市が定着しないのは、やはりこれは我々サイドに問題があるのではないかと考えております。先ほどの傍士さんのお話しに関係しますが、北九州という地名を国民の中にしっかり浸透させ得るのは、やはりスポーツ、あるいは文化ではないかと思っております。わが故郷を日本中の人に、小倉でもなく八幡でもなく門司でもなく「北九州市だ」と言えるためには、今せっかく芽が育っている、このニューウェーブをJリーグに送り込むことであろうと思って応援しております。ただ、一企業としての応援は限界がありますので、お客様の荷物を駐車場まで運ぶポーターとしてニューウェーブの一部の選手を雇用したりという、「縁の下の力持ち」とまではいきませんが、そうした形でお手伝いをさせていただいております。本当は、ユニホームの胸のマークのメインスポンサーになればよいのかもしれませんが、今はじっと我慢して、そのうち市民の皆さま方がいっぱい買い物をしていただければ、そうしたこともできるようになると思っております。

私どもの企業も、北九州から逃げ出すわけにはいきませんので、しっかりこの街を活性化したいと思います。本当にJリーグ、いずれはJ1に上がって、浦和レッズのサポーター5千人がこの街に来たら、どうなるのだろうかと思っております。デパートで買い物する人は仮に多くないとしても、焼き鳥屋もいっぱいになるでしょうし、ホテルもいっぱいになるでしょう。そうなるとお金が回って、行き着く先として、わが社にもお金が来るであろうと思っております。地域全体の経済に役立つと思



中村 真人 氏

います。「アビスパ福岡があるから、それでいいじゃないか」と福岡の財界の人は言います。「アビスパでも経営的に厳しい面があるのに、北九州でサッカーなんてやめておいた方がよい」と忠告する人もいます。ところが私は、基調講演の新潟のお話でもありましたように、やはりサッカーは「地域」というものに非常にこだわるという理念がありますから、その意味から考えると、福岡県だから1チームでよい、というのは違うと思っています。J2に上がれば、来年はアビスパもJ2でしょうから、まず「福岡ダービー」ができるのです。今は福岡へバスに乗ってアビスパの応援に行く人がいますが、福岡のアビスパサポーターが北九州で開かれる福岡ダービーをバスに乗って見に来るようになるのです。北九州から福岡へ一方通行するのではなく、双方向で行ったり来たりする。200万都市圏がお互いに行き来して、経済の活性化に大きく繋がってくると思っています。そうしたことも考え、応援をしております。

【南博准教授】

どうもありがとうございました。今、山木戸さん、中村さんからお話をいただきました。非常に様々な形でニューウェーブに対する支援をしておられ、そして大きな期待がニューウェーブに寄せられていると思います。そこで横手さんに、ニューウェーブの経営者として、ニューウェーブの存在意義、あるいは今後の地域貢献に向けたビジョンなどについてお話しいただければと思います。

【横手敏夫氏】

いつも大変ニューウェーブがご心配をおかけしています。やっと昨日勝ちまして、なんとか今、2位をキープしております。混戦状態でございますが、まだまだ油断はできませんが、必ず今年、J2に昇格し北九州の市民の皆さまに夢と感動を与えたいと思っています。今後とも、ご支援・ご声援よろしく申し上げます。

さて、「ニューウェーブの存在意義」という本題について、私から三点ほど申し上げます。一つ目は、市民の皆さまに誇りと感動を与え、市民の皆さまから愛されるニューウェーブでありたいと思っています。やはりJ2に上がらないと、なかなかそういう事はできないと思います。例えばJ2に上がると、毎週、全国のスポーツ紙に「北九州」という名前が出ます。北九州は、東京・関西から見たら「北部九州か」といっ

も言われます。小倉・門司等々と言って初めて、認識していただけることもあります。北九州出身で全国に散らばってお住まいの方はたくさんおられます。そうした方々を含め、北九州に愛着と誇りを持ってもらうためのニューウェーブでありたいと思います。

二つ目ですが、とにかく、地域のシンボルになりたいと思っています。北九州という地域のシンボルは、今、ほとんど無いわけです。そこで、我々ニューウェーブがJリーグに上がることによって、地域のシンボルになる、ということです。現在は年に1回、「わっしょい百万夏祭り」などがありますが、ニューウェーブ北九州を育て上げることによって、この北九州の旧5市の市民の皆さんが一体感を持ち、心が一つになる、そのような地域のシンボルになりたいと思っています。本城競技場で年間20試合近くホームゲームを開催することになるとと思いますが、それが一つのお祭りであってほしいと思うのです。「わっしょい百万夏祭り」の小型版が年間20試合近く開かれるのです。Jリーグの試合の前には小学生の皆さんが試合をしたり、競技場の外には色々な売店、出店がでて地域の名産品も売ったりすることをイメージしています。それから、地域の皆さん方が吹奏楽とかよさこい踊りとか、色々なものを競技場で発表していただくということもあるでしょう。サッカーだけを見るのではなく、本城競技場で市民の皆さんがお祭りをするというのをやっていきたいと思っています。

それから三つ目は、先ほども話が出ましたが、Jリーグ百年構想にある「総合スポーツクラブ」をやっていきたいと思っています。今すぐはできませんが、近い将来の話としてです。北九州はスポーツが盛んです。特に子どもさん達は、サッカー、ラグビー、バスケットボール、バレーボール、野球などが強くて盛んです。今、日本で一番進んでいる、基調講演者の池田会長の新潟のような、総合型スポーツクラブを将来やっていきたいです。本年春に新潟を視察させていただきました。私は思うのですが、今の学校では先生方が大変忙しかったりするために、スポーツの課外活動があまりできないように感じます。そのため、地域のクラブがそれを補完している状況にあると思います。私の経験を踏まえても、特に小さな子どもの頃は、スポーツをすることによって、俗に言う「根性を鍛える」とか「チームワークを学ぶ」、「人の痛みがわかる」といった、基本的な人間学を学ぶと良いのではないかと思います。このような意味で、総合スポーツクラブによって、青少年の健全な育成、市民の健康増進に寄与したいと



横手 敏夫 氏

思っています。

地域密着型のクラブ経営の話は後ほどさせていただきます。

【南博准教授】

どうもありがとうございました。今までの市民・経済界・チーム経営者のお三方のパネリストのお話をお聞きいただいて、Jリーグ百年構想を推進されるお立場として、傍士さんから何かアドバイス等がありましたらお願いします。

【傍士 銑太 氏】

はい、まず山木戸さんのお話は非常に良い話だと思います。チームの将来、つまり若い世代を応援するという考え方、あるいは女性も大事なのだという点は、「地域の未来が何であるか」を非常に的確に言われています。思うのですが、自分ひとりで試合を見に来るのではなく、子どもや誰かを誘って来た場合、安い“エスコート切符”で入場できるようなことも、是非考えていただければよいのではないのでしょうか。また「福岡を応援する悔しさ」ということをおっしゃっていましたが、北九州市の自動車のナンバーが仮に福岡ナンバーであったら、絶対「なぜ北九州ナンバーではないのか」と思う気持ちが出てくることと同じだと思います。北九州の場合は今も北九州ナンバーですが、全国ではこうした悔しい気持ちを持つケースはたくさん有り、平成18年に誕生した仙台ナンバーも同じ気持ちがあったのではないかと思います。

それから中村さんのお話ですが、後援会の取り組みは非常にありがたいと思います。企業スポーツと違って、それぞれの方々がパートナーであるという意識で支援をいただいています。この前、私どもの研究所で調べたのですが、調べれば調べるほど、スポンサ

ーの方に話を聞けば聞くほど、双方はパートナーの関係だ、ということです。例えば、「商売のセールスポイントになっており、アルビレックスのパートナーだということを書いたと、それで商売がうまくいくのだ」ということを色々なところから聞きました。是非こうしたイーブンの関係で、パートナーであることが誇りになるという企業がどんどん増えてくれればよいと思います。横手社長が着任される前、ニューウェーブがJFL昇格を決めた時、埼玉県熊谷に私も試合を見に行きました。たぶんニューウェーブの方が一番涙して喜んだのは、あのJFLに上がった時のあの試合だったのではないかと思います。ファジアーノ岡山の木村社長も、Jリーグに上がった時よりずっとJFLに上がった時の方が感激したとおっしゃっていました。たぶん、その時には既にかなりJリーグを目指す気持ちが芽生えていたのだらうと思います。よく「Jリーグを目指す」ということを言われますが、Jリーグが目指しているものが何かというのは正に今、横手社長がおっしゃったことですので、それを是非一つひとつ実践していただければと思います。

《プロスポーツを支えるために地域は何をすべきか》

【南博准教授】

ありがとうございました。今、ニューウェーブ北九州を事例にお話をいただきましたが、こうしたスポーツを通じた活性化に関しては、他の様々なスポーツ、様々な団体での取り組みにおいても共通する面は多いのではないかと思います。

それで話題を次に移します。北九州地域のスポーツの振興にあたっては、市民、企業、学校、それから行政といった地域を構成する様々な人々や団体の力が重要と言えます。スポーツ全般に共通することですが、とりわけ多くのファン、あるいはスポンサーを必要とするプロスポーツにとって、地域の力というものは必要不可欠であらうと思います。そこで、「ニューウェーブ北九州のようなプロスポーツを支えるため、地域は何をすべきか」ということについて、皆さんのお考えをお聞きしたいと思います。まず市民のお立場から、先ほどもお話いただきましたように既にプロスポーツの支援を実践しておられます山木戸さんにお話しいただければと思います。

【山木戸 祥子 氏】

支えるためにできることと言えば、とにかくスタジアムに実際に足を運ぶことが、一番だと思っています。

私自身も以前は実はサッカーのことは全然知らず、ルールも知らなかったですし日本代表で活躍している選手のことも全く知らなかったのですが、日韓共催の世界カップの際、たまたまチケットが手に入って、全く興味はなかったのですが「とりあえず行ってみよう」ということで行って試合を見て、その帰りにはものすごくサッカーに興味を湧かせていたのです。それは、テレビで観ていると90分というのはすごく長く、正直私は最後まで観たことが1回も無かったのですが、実際に現地に行くと、例えばボールを持っている選手の動きを見ることができたり、応援しているサポーターを中心とした現場の一体感のようなものを味わうことができた、というのが一番大きな理由でした。

とにかく、興味あまり無いから、ルールを知らないから、選手を知らないから行かない、ということではなく、せっかく今、J2に上がることができるかもしれないという状況まで来ているので、少しでも興味があるのであれば、もうとにかく、まずスタジアムに足を運んでほしいと思います。先ほどの学生さんたちの発表にもあったと思いますが、若い大学生くらいの人たちの観戦者がすごく少ないと私も思っていますので、是非若い人たちにも、もっともっとスポーツを実際に目で見て欲しいなと思います。

【南博准教授】

ありがとうございます。続きまして経済界のお立場から中村さんをお願いいたします。

【中村真人氏】

少し話が本題から外れるかもしれませんが、この1週間、10月6日から12日までの朝日新聞の記事の中で、どこの地名がどれだけ上がったのか調べました。そうすると、事件事故に関わる地名は福岡が25件でトップです。そして第2位が北九州市で14件。第3位が東京で13件。第4位が大阪が10件という結果でした。事件事故の内容はともかくとして地名を徹底的に拾った結果です。それからスポーツの項目になると、東京が20件でトップです。それから福岡が16件で2位。横浜が同じく16件。仙台が時期的に楽天イーグルスのこともあって8件で第5位でした。我が北九州市は1件です。北九州という地名が表現されたスポーツ欄の記事は1件でした。先ほどの話の延長ですが、やはりこの地名をとにかく出していくことが、この地域の活性化につながるのではないかと、この結果を見

ても思います。

それから、「支える」ということについてです。今、後援会は株式会社ニューウェーブ北九州と色々相談しながら、商工会議所が中心になって動いていますが、結局、すべての事には、まずお金がいるわけです。現在、Jリーグに上がるためになんか選手補強をして、財政がかなり厳しい状況です。そして、Jリーグに上がるとなると、平均観客数3千人もさることながら、やはりメインスポンサー、出資者をはじめ資金面を確立し、その信頼性がなくてはJリーグ入りを認められないわけです。一方で今のような経済状況があり、企業頼みの出資はもはや厳しい状況です。したがって個人あるいは団体から、少ない金額を広くたくさんの方からご提供いただくことに我々としてはもっと努力をしていく必要があると思っています。とにかく財政面の基盤を確立することのお手伝いを経済界としてはやるべきであろうと思います。

赤字続きではやはり球団としての永続性がありません。以前、ヴァンフォーレ甲府の社長にお越しいただいて講演会を開いたことがあります。その時、ヴァンフォーレ甲府がかつて倒産寸前になり、もう解散するしかないという状況になったことがあるという話をうかがいました。しかし私は甲府に2年くらい前に行きましたが、例えば焼き鳥屋に入ると、その中は全部ヴァンフォーレのブルーの旗でいっぱいなのです。もう街中がヴァンフォーレのブルーになっている状況です。甲府は人口19万くらいで、北九州市よりも少ない人口であり、山梨県全県で90万人です。「ここまでもっていったことは、やはり大変なことだ」と思いました。それからもう一つ、私が関心を持ったのは、草津の温泉宿で、ザスパ草津が元・日本代表の有名選手も獲得しつつ、選手が温泉場の掃除をしながらチームを運営していたということです。このような例を見ると、アビスパのやり方とは違う、北九州バージョンのやり方のプロサッカーチームができるんじゃないか、と思っております。

いずれにいたしましても、とにかく資金の問題が第一でありますので、熱い思いを是非皆さま方も寄せていただき、何とか財政基盤ができるよう、行政にももちろん応援いただかないといけません。まず市民である我々がしっかりやるということを考えて推進してまいりたいと思っております。宜しくお願いします。

【南博准教授】

ありがとうございます。続きまして、大学の立場

から真鍋さんにお話をいただきたいと思います。

【 真鍋 和博 准教授 】

何をすべきかと言われると非常に私には荷が重いのですが、先ほどお話しさせていただきましたように、スポーツと大学の関わりを考えた場合、やはりそこが学生の教育の機会・場所だということが一番大きいと考えています。それ以外にも、スポーツ支援を通じて、地域貢献、大学の広報、ブランディングにも役立つのではないかと考えています。

さて、以前から理系の学生は企業から課題をいただいて研究し、商品や製品を開発するというPBL (Project Based Learning : 問題解決型授業) が行われていたのですが、これを文系の領域でやっていたところから先ほどお話しした地域創生学群の取り組みです。有名な教育学者デューイも、やはり現場で経験させることが教育につながるんだと言っており、教育の場として参加させていただきたいと考えています。

一方、私個人として思うところですが、私は北九州市の八幡で生まれ育ち、今は福岡市西区に住んでいます。先日、面白いことがありました。小学校4年生の息子の参観に行ったのです。そうしたら、男の子のほとんどがホークスの帽子をかぶっているのです。私の息子もそうです。これは凄いなと思いました。その地区には秋山監督のお家があるという事等もあるのですが、そのような状況です。「これはなぜなんだろう」と思うのです。一方で、息子をニューウェーブの試合に何回か連れて行きました。そして今朝、家を出るときに久しぶりにスーツを着ていたので「今日お父さんは仕事？」と息子に言われたので、「今日、ニューウェーブに関するシンポジウムがあって、話をするんだよ」と話したら、「えっニューウェーブ？タチコ（注：ニューウェーブ北九州の外国人選手の名前）来ると？来るならサインもらってきて」と言うのです。しかしホークスファンなのです。ですがニューウェーブの試合を観に行った印象が凄く強く、息子自身、ニューウェーブのファンになっていますし、自宅のパソコンに、ニューウェーブのホームページを自分でブックマークし、たまに情報を見ている。先ほど山木戸さんも言われたとおり、やはり、一回試合に行く、という事だと思うのです。そこを何とか、市を挙げておこなっていけば、少しずつ盛り上がって来るのではないかと思います。

【 南 博 准教授 】

ありがとうございました。それではプロスポーツ団体としてのお立場から、横手さんに地域の方々をお願いしたいことなどについて、お話しいただければと思います。

【 横手 敏夫 氏 】

私も去年までは、熱烈なホークスファンでございました。今はニューウェーブ一本でございます。昨年、私が株式会社ニューウェーブ北九州の社長となる内示を受けてすぐ読んだ本が、本日の基調講演者の池田会長がお書きになった『地方の逆襲』でございます。非常にすばらしい本でございます。読んでない方は是非とも読んで下さい。私はこの1年間、クラブ経営をしてきましたが、常にアルビレックス新潟さんのクラブ経営をモデルにしてきました。まだまだ足元にも及びませんが。

スポーツは、「する」スポーツ、「みる」スポーツ、「ささえる」スポーツとありますが、プロ経営ですから、やはり支えがないとやっていけないと思っています。そこで、私どもは市民クラブとして、地域に根ざし密着したクラブ経営をやりたいと思っていますので、三点ほど、我々の方針とお願いをお話しさせていただきます。

まず、やはりサポーターズクラブに入りたいという点です。昨年の会員数は1,125人でしたが、今年は色々頑張り、あるいはご支援を受けまして、3,800人くらいになっております。アルビレックス新潟は15,000人位かと存じます。そして、私どもは来年は少なくとも5,000人に増やそうと思っており、早い時期に10,000人体制に持っていきたいと思っています。今は、市役所、労働組合を含めた企業の方々を中心です。やはりまだまだ私どもは町内会、学校、商店街など地域に浸透しきっていませんので、来年はこの点が課題だと思っています。色々な方々のご支援で、このサポーターズクラブの拡大を進めていきたいと思っています。

二点目は、市民の皆様幅広く薄く支援をしていただくことが前提で、近々、持ち株会を立ち上げます。今、資本金が1億700万円でございますが、これは地元の有力企業様を中心に出資いただいております。これからは、広く市民の方々から、一口5万円です。高いといったら高いのですが、個人を中心とした持ち株会を作り、当面、3千万円くらい今年に出資いただきたいと思っております。併せて、募金も募らせていただきたいと思っております。ちょっと本題から外れますが、J

リーグに加盟することができた場合、すぐ12月に2千万円の入会金を納めなくてはなりません。それから年会費も先払いなのです。従って4千万円くらいのお金が必要となります。それから今年はチーム強化と観客動員でかなりお金を使いましたので、非常に台所が苦しい状況です。こうしたこともあって、持ち株会と募金で広く薄く市民の方々から資金的な支援を頂戴したいと思っていますので、宜しくお願いいたします。

三点目は、先ほど山木戸さんからお話がありました。ニューウェーブの現在の選手26名中、地元選手は2名だけです。来年J2に昇格する前提で考えますと、できるだけ地元の大学出身者の新卒を入れたいと思います。それから北九州出身のJリーガーが20名位いると思いますので、そうした方々をリターンさせたいと思います。特にお願いしたいのは、私どもは来年はアンダー18（注：高校生年代）、アンダー15（注：中学生年代）を強化しますので、優秀な小学生、中学生を我が下部組織に是非とも入れてほしいと思います。

【南博准教授】

ありがとうございました。横手社長、ちなみに来年からチーム名を新しくされると思いますが、その点についても簡単にご紹介いただければと思います。

【横手敏夫氏】

まだ私も慣れていないのですが、「ギラヴァンツ」です。ギラヴァンツとは、まずイタリア語でジラソーレ、これは北九州市の花である「ひまわり」という意味です。それから、「前進する」という意味のアヴァンツァーレというイタリア語があります。それで、ジラとアヴァンツを合わせて、ジラヴァンツになります。そしてジラはちょっと語感が弱いので、英語読みでギラと置き換えまして、ぎらぎら輝くギラヴァンツとしました。ニューウェーブが近い未来、アジアに向かって、また世界に向かって前進するという意味も込めております。

【南博准教授】

ありがとうございます。本日はまだ現時点の名称であるニューウェーブ北九州という事でお話を進めさせていただいておりますが、今、お話がありましたように、来年から新しいチーム名になるという事でよろしく申し上げます。

さて、今、各パネリストからお話がありました。



南博准教授

プロスポーツの一つの事例としてニューウェーブ北九州を考えた場合、行政としての支援に対する考え方というものを小松さんにお話しいただければと思います。

【小松真氏】

先ほど横手社長から「非常に厳しい状況」というお話がありました。本来、行政がプロスポーツにどのように関わるのかということは、なかなか難しい問題です。基本的にプロスポーツというものは、入場料収入あるいはスポンサー収入等による独立採算が原則ではなかろうかと思えます。しかしながら北九州市としては、市民が一つになって応援できるニューウェーブ北九州というチームの存在というものは、非常に貴重でございます。特にJ2に昇格していただきたいということも含めて、そこに公益性というものを我々は見出して、ご支援をさせていただいてきている次第です。

支援の内容について若干ご紹介をさせていただきますと、ニューウェーブに対しては平成18年から補助金を支出しています。本年度は、非常に財政状況が厳しい中ではございますが、5千万円の予算を計上させていただいております。そして人的支援としては、昨年4月にスポーツ部門が教育委員会から市長部局である企画文化局に移管されたことに伴い、プロスポーツ振興課長ラインが創設されました。課長以下3名の体制ですが、そのラインを中心に様々な支援をさせていただいております。特に集客対策では、商工会議所、チーム、行政が一体となったプロジェクトチームを作り、色々な取り組みをやってきており、今シーズンについては一定の成果が上がっているのではないかと考えています。また、それ以外にも市政だよりや市政番組などの広報メディアを積極的に活用し、ニューウェーブの露出度アップに力を尽くしています。また、

サポーターズクラブへの加入促進も行っている等、様々な形で行政としても後押しをさせていただいています。

なぜ税金を使って、補助金等も含めニューウェーブを市が支援するのか、という理由ですが、大きく二つあると思っています。一つは、先ほどから話題になっていますが、街を活性化させる、地域の絆を強めるといふ、まちづくりの観点です。市民が一丸となって応援できるチームというのは非常に貴重であり、J2に加盟すれば全国から対戦チームがやってきます。とりわけ、九州リーグとでも言いましょうか、アビスパ福岡、サガン鳥栖、ロアッソ熊本、それから大分トリニータが残念ながらもしJ2に降格した場合には、ニューウェーブ北九州を含めて5つの九州のチームがJ2に揃います。こうした中で九州勢同士で戦った場合、かなり大勢の方が北九州の本城に来訪することが期待できます。まさしく都市間のプライドの激突という事で、そうなる北九州市民も非常に熱くなって盛り上がるのではないかと考えています。それにより、北九州の名前が全国に知れ渡るシティプロモーション効果とか、市民の誇りや一体感が醸成されるとか、色々な効果があると思います。また、先ほど傍士さんからお話がありました「スポーツ観光」の効果も期待できます。北九州を訪れた対戦チームのサポーターの方々が、色々と観光をして、お金を落として地域の活性化に寄与していただけるということもあるのではないかと考えています。効果を色々述べましたが、これが支援をさせていただく理由の一つです。

それから二つ目については、最初に私から「受け皿づくり」ということを申し上げましたが、ニューウェーブ北九州は、Jリーグの理念である総合型スポーツクラブも目指しており、まさに我々が指向しております総合型地域スポーツクラブの育成という方針と非常に合致します。それから、アスリートの受け皿、競技スポーツの受け皿としても、非常に期待感がございします。そういったことで、ニューウェーブの活動や存在について行政としては公益性を見出しており、色々な支援とともに、議会の議決のもとに税金を使わせていただいている状況です。

【南博准教授】

ありがとうございました。今、地域は何をすべきか、という点について、北九州のそれぞれのお立場の代表として5人のパネリストの方々にお話をいただいたところですが、傍士さんのお聞きになられて、どの

様なことをお感じになられたか、コメントをいただければと思います。

【傍士 銑太氏】

皆さんが「スタジアムに足を運ぶことから始める」という話をされています。ここ北九州市は松本清張生誕の地であり、彼が得意なのは「犯人の動機が何だったか」ということ。やはり今、一番大事なことは、スタジアムに足を運ぶ「動機づくり」だと思います。何でもいいのです。とにかく動機づくりなのです。動機がどこにあるのかというと、スタジアムにあるだけではなく、例えば、クラブの存在を知らなければ話にならないのです。私が是非言いたいことなのですが、存在感にとって一番大事なことは、「色の力」だと思います。ニューウェーブは、名前は変われどもチームカラーの黄色は変わりません。これは市の花であるひまわりの色だということです。基調講演者の池田会長は、今、ダークスーツをお召しですけれども、スーツの裏側はアルビレックス新潟のチームカラーであるオレンジ色の裏地にしておられます。これも一つの存在感を意識されているわけです。私も今日はこの黄色のネクタイを意識してつけてきました。やはり「街の中が何で黄色なの？」「それは、ニューウェーブ北九州の色だよ」という何気ない会話がされるような、あるいはこれから冬を迎え皆さんマフラーをする時にできるだけ黄色いマフラーをするというような、そうした何気ないところからサポーターになっていく事が大事だと思います。先ほどの話でも、サポートの種類は金銭的なことだけではなく、サポートの主体も大学、企業、市民、行政など色々な主体があります。その組み合わせですから、その中で「自分が何ができるか」ということを考えていただきたいのです。「何ができないか」ということはどうでもいいのです。2年前にシンポジウムをさせていただいた時に、アンケートの書き方にまで私は口を出し、「皆さん方はこれが終わった後、何をしようと思いますか。何ができますか。」ということを書いてもらいました。私は全部目を通しましたが、足を運ぶというのが一番多かったです。今日もアンケート用紙が入っていると思いますが、そこにもそういった類の質問があると思います。「何ができるか」ということが結局、重要なことだろうと思います。

その時に、最初に申し上げましたように、「壁」を取り払って考えていただきたいのです。色々な「壁」を皆さん持っています。子どもは一番「壁」を持って

いないのです。「総理大臣になりたい」とか、「医者になりたい」とか思っていますが、大人になるに連れて色々な壁が自分の前に立ちはだかって、それで諦めたりするのです。その子どものような感覚で「壁」を取り払ってクラブと向き合っていたときに、初めてそのクラブが、愛されるクラブに近づいていくのではないかと思います。

「Jリーグが目指しているもの」と「Jリーグを目指す」というのは2つあり、「Jリーグを目指す」という皆さんは、ピラミッドの上のJ1・J2を目指していますが、ピラミッドは宙吊り状態で作っているのが現状で、J1・J2の下の跳び箱のような部分が、Jリーグが目指しているもう一つの大きなものなのです。それは皆さん方が、地域リーグ、JFLで戦って作り上げている「わが街のチーム」というものであり、ヨーロッパでは当たり前のように上から下までであるわけです。しかも「下から上」に作られたわけです。ところが日本の場合、それを「両方から」作っているという点が、非常に難しいところなのです。是非、「Jリーグが目指しているもの」と、皆さんが「Jリーグを目指す」という2つのことを考えていただきたい。来年は昇格をお待ちしていますので、頑張ってくださいねと思います。

【南博准教授】

ありがとうございました。各パネリストの皆様から大変有意義なお話をいただくことができました。コーディネーターとして厚く感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。パネルディスカッションは以上で終了させていただきます。

5 フロアとの質疑応答

【南博准教授】

引き続き、せっかくの機会でございますので、本日もご参加いただきました市民のかたに、パネリストの皆さんの議論をお聞きいただきご質問になりたい点等があれば、挙手をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

【A氏】

質問というよりもお願いなのですが、ニューウェーブは是非、日本のバルサ（注：スペインのFCバルセ



質疑応答風景

ロナ）になっていただきたい。若手の育成をしっかりとしていただきたい。先ほどの発言の中でもありましたが、私自身もサッカーやラグビーをやってきたのですが、最近の東福岡高校（注：福岡市に所在し、サッカー部、ラグビー部とも全国トップレベルの強豪校）は、私が知っている限りでは、選手の半数近くは北九州市出身です。北九州市は受け皿が無い地域なのです。是非、若手の育成をしっかりといただいて、自前の選手、本当に応援できる選手を育てていただきたいと思えます。自分も小学生を指導していたのですが、しっかり力を持った選手がたくさんいます。Jリーグで本当に通用するであろう選手もいますので、本当に本気になって頑張っていたいただきたい。そして、サッカーだけに限らず、スポーツ文化をしっかりと、私たち市民も応援しますので、行政も大切に育てていって欲しいと思っております。

【南博准教授】

ありがとうございました。横手さん、今のお話に何かコメントがあればお願いします。

【横手敏夫氏】

アドバイスいただき本当にありがとうございます。先ほども少し触れましたが、もう少し詳しく言いますと、アンダー18（注：高校生年代）とアンダー15（注：中学生年代）の2つにつきまして、来年は本当に強化します。しっかりした指導者をつけます。今は、指導者はボランティアとして無給でやっていただいていますので、それなりの給料を支払い、しっかりした指導者をつけます。そしてアンダー18、アンダー15につきましては、サッカー協会を通して地域のサッカークラブ、あるいは学校と連携をとっていききたいと思います。どのような進め方が良いのか、色々と協議して

まいりたいと思っています。サッカーが強い地域ですから、この地元の選手を、東福岡高校とか国見高校にとられるのではなく、自前で育成し、近い将来 26 名の選手のうち 7~8 名は地元選手で 3~4 名は先発メンバーだというチームを作っていきたいと思っています。今後ともご声援よろしくお願い申し上げます。

【南博准教授】

ありがとうございました。それではお二方目のご質問をお願いいたします。

【B氏】

小松様に今後の行政の支援についてお聞きします。多くの J リーグチームでは企業・行政・市民の三位一体でクラブを支えているのですが、今のお話にあったような厳しい経済状況の中で、なかなか企業として大きな支援をしていくことは難しいと思います。本当はプロチームとして自立した経営が理想なのですが、体力をつけるまで、行政として来年以降の補助金等も含めた今後の支援について、どのようにしていただけるのかお聞きしたいと思います。

【南博准教授】

行政からの支援を来年度以降どのようにするかという点に関して、恐らく来年度の予算に関してはこれから詳細を詰めていかれる段階だろうと思いますし、当然、市議会の議決も必要になってきますので、今の段階でお話いただける範囲で、小松さんにお聞きできればと思います。

【小松真氏】

行政の支援でございますが、原則論としては、先ほどお話ししましたように、プロスポーツであるからには「いつかは独立採算を」と、もちろん横手社長もお考えだと思います。ただし、現実的に今の経済状況を見ると、なかなか難しいとも思っています。一方、行政としましては、原資は市民の皆さまの税金であるわけです。これをいたずらに、半永久的にずっと出すことはなかなか難しいと思っています。いつまでの期間かということもなかなか難しいですし、また金額についても予算の査定あるいは議会の議決で決まってくるので、「いつまで、いくら」ということは、今は申し上げにくいです。

私の個人的な意見とお断りした上で発言させていただきますが、やはり新スタジアムというものが契機

になるのかなと思っています。スタジアムについては、今年やっと調査費がつきまして、今、どうするのかということ色々検討しています。新スタジアムができれば、現状より収容力があるものになるので、チームにかなりの入場料収入あるいは広告収入も入ってくるのかなと思っています。当面は本城陸上競技場で開催しますが、約 1 万人の収容力です。その 1 万人の規模でチーム経営をやっていくということは、なかなか厳しいであろう、ということがあります。いつまでということも申し上げにくいのですが、そうした状況等々を行政としても勘案しながら、時期あるいは金額について、議会の御審議も賜りながら決定していくことになろうかと思えます。なかなか明確な答えができず申し訳ありませんが、以上です。

【南博准教授】

ありがとうございました。次の方、お願いします。

【C氏】

今のお話なのですが、新スタジアムは、陸上競技場スタイルか、球技専用スタイルか、どちらの予定か知りたいのですが。

【小松真氏】

そうしたことも含め、また場所をどこにするのかということも含めて、今、調査を行っています。

【南博准教授】

そういうことでご了解いただければと思います。まだ複数のかたに手を上げていただいておりますが、申し訳ありませんが次の方が最後ということでお願いします。

【D氏】

長いこと北九州に住んでいまして、炭鉱はなくなった、新聞社は移動したなど、非常に北九州の地盤沈下が進んでいます。そこからどのように再スタートするか。今日、話を聞いていて、北九州地域の活性化ということに、やはり本腰を入れてほしいと思います。95 万の市民が本腰を入れて立ち上がるようなアピールが非常に弱いと思っています。J リーグを中心にした今日の話ですが、よくわかります。J リーグも頑張っています。そして、私はやはり北九州市立大学が、95 万市民の声を聞いて、卒業生の声を聞いて、そして本格的に、大地に足をつけ、地域を巻き込んだ取り組み

をしてほしいと思います。今日の話聞いていて、ちょっと線が細いなと思いました。もう一度、大地に足をつけて北九州市の100年の計を検討してください。

【南博 准教授】

ありがとうございました。本学に対する貴重な激励のお言葉と思います。そうしたことも踏まえながら、今後、考えていきたいと思っております。

それでは以上で質疑応答を終了させていただきます。まだご質問の手を挙げていただいていた方、本日は時間の都合でお話をお聞きできなかったこと、大変申し訳ありません。深くお詫び申し上げます。

各パネリストの皆様方、本日はありがとうございました。

6 主催者等あいさつ、閉会

【司会】

最後に主催者である北九州市立大学都市政策研究所、晴山英夫所長より閉会のご挨拶を申し上げます。

【晴山 英夫 所長】

本日は大変長い時間、私どものシンポジウムにご参加いただきましてありがとうございます。私どもは敢えて北九州地域がやや立ち遅れている、あるいは戦略的に弱いと感じるスポーツ・文化によるまちづくり、未来づくり、というテーマに挑戦いたしました。今回のシンポジウムでは、非常に内容豊かな実りあるディスカッションができたと思います。本日の成果をさっそく私ども都市政策研究所に持ち帰りまして、スポーツや文化によって地域をどうやって創っていくのか、具体的な活性化のプログラムを調査研究によって作りあげていきたいと思っております。本日は長時間、本当にありがとうございました。

【司会】

以上をもちましてシンポジウム「スポーツを通じた北九州地域の活性化」を終了いたします。最後までご参加いただき、誠にありがとうございました。

(本章の編集責任者： 南 博)